

## アスベスト被害の「クボタ旧神崎工場」付近を歩く

大手機械メーカー「クボタ」の旧神崎工場では、1957年から75年にかけて、毒性が強いとされる青石綿を使って水道管などを製造。多い年で8千トン近くを使い、国内最大級の石綿使用工場だった。昨年6月、それまでに工場の従業員ら78人が中皮種などで死亡し、周辺住民5人（うち2人死亡）も発病していたことが発覚（朝日新聞2006年4月18日付による）。



JR尼崎駅から数分のところの旧神崎工場の敷地には、写真のような立派なビルが建っており、記事にあった工場風景ではない。ここを訪ねたいと思ったのは、深刻なアスベスト被害をもたらした工場よりも、その近くにある「浜つばめ団地」である。

じつは「にっぽん再発見 - この街に生きた足跡を求めて」という番組を見て、この団地を知ったからだ。番組では48歳の弟をなくした兄が、幼い頃の思い出や病室で母が看病する姿を絵に残すことなどを紹介している。中学時代は体操の選手であった弟が、なぜ中皮種に冒されたのか。団地のベランダから、すぐ近くにあるクボタの工場と野積みされた水道管が映し出される。アスベストによる中皮種の潜伏期間は30～50年、肺がんは20～40年間といわれ、兄は自分がいつ発症するか悩む。



宮本憲一先生は「アスベスト災害は世界的規模で長期にわたる被害を発生させる史上最大の産業災害の可能性があると警鐘を鳴らしている。それにしても私を含め、アスベスト問題に対してまだまだ「鈍感」なのではないか。複雑な思いで「浜つばめ団地」をあとにした。

（2006年7月17日 記）